

役割モデルと制御焦点が内発的動機づけに与える影響

筑波大学大学院（博）人間総合科学研究科 及川千都子

筑波大学心理学系 桜井 茂男

The effects of role model and regulatory focus on intrinsic motivation

Chizuko Oikawa and Shigeo Sakurai (*Institute of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8502, Japan*)

This study suggests that individuals are motivated by role models who encourage strategies that fit with their regulatory focus. Thus, while promotion-focused individuals, characterized by a preference for strategies pursuing desirable outcomes, are more inspired by positive role models who emphasize strategies for achieving success, prevention-focused individuals, characterized by a preference for strategies that avoid undesirable outcomes, are more motivated by negative role models who stress strategies for avoiding failure. Study 1 developed a Japanese version of the regulatory focus scale by Lockwood, Kunda and Jourdan (2002) and tested its validity. Study 2 investigated the effects of role models in terms of the match or mismatch with regulatory focus. A significant interaction effect was observed on the desire for competence within intrinsic motivation.

Key words: role model, regulatory focus, intrinsic motivation

問題と目的

人生において、他者から影響を受けることは多い。例えばオリンピック選手を見てあのようになりたいとスポーツに励んだり、一方で受験に落ちた人を見て自分はそうならないようにしようと一生懸命勉強したりする。これらに見られる他者は、何の相互交渉も持たずに個人に対して影響力を持っている。

このような他者は、「役割モデル」または「ロールモデル」(role model)と呼ばれる。この方面の研究は従来、モデリング研究 (Bandura, 1976) や、行動療法や認知行動療法の治療法研究の中で (春木, 1984) 扱われてきており、最近では役割モデルという名称は無くとも他者の影響という点で、自己概念研究や社会的比較過程研究、キャリア発達理論などの中で数多く扱われている (Krumboltz, 1996; Lockwood & Kunda, 1997; Lockwood, 2002; Stapel & Koomen, 2001; Taylor & Brown, 1988)。

これらの研究において、役割モデルとは親、教師、スーパーバイザー、メンター、友人などに代表される、個人に対して影響的な位置にある人であるとされてきた。それはまた個人にとって模倣をする例として示されたものである (Gibson, D.E., 2004)。しかし近年の研究では、役割モデルの定義のあいまいさが指摘され、その指摘に沿って、個人の発達の欲求や目標を基にした理想自己あるいは可能自己を表す人物のことであったと再定義された (Gibson, in press; Ibarra, 1999)。

また、社会的比較過程研究や自己概念研究において、役割モデルは2つの認知的次元で解釈されることが示されている。その1つはポジティブ役割モデル／ネガティブ役割モデルという次元である。ポジティブ役割モデルとは優れた成功を収めている人物のことを指し、理想自己・望まれた自己・ポジティブな達成・向上心などと関連している (Lockwood & Kunda, 1997, 1999)。ネガティブ役割モデルとは不幸を経験している人物のことを指

し、恐れている状態・避けるべき自己・災難に遭う可能性・災難を回避するために避けるべきミスなどに関連している (Lockwood, 2002)。もう1つは全体的イメージとしての役割モデル／特定の部分についてのみ参照される役割モデルという次元である。前者はパーソナリティや行動様式などを全て含めた全体的な役割モデルを指し、後者は個別のパーソナリティや行動様式だけを参照した役割モデルのことを指している。しかし全体的な役割モデルを探すことは困難であるため (Ibarra, 2000)、実際には参照したい側面それぞれについて様々な役割モデルを抱えていることが多いとされる (Gibson, D.E., 2004)。

以上の2次元のうち、特にポジティブ／ネガティブの次元について様々な検討がなされている。家島・榎本 (2003) は、大学生の理想や生き方が誰によって影響されているかについて、模範モデル (ポジティブ役割モデル) と反面教師モデル (ネガティブ役割モデル) とに分けて比較検討した。その結果、模範モデルよりも反面教師モデルの方が強く意識されやすいことが示された。

また Lockwood, Kunda & Jourdan (2002) は、個人においてポジティブ役割モデルもしくはネガティブ役割モデルからの影響されやすさに寄与している要因は、その個人の目標や思考スタイルであると予測し、学業面での役割モデルが学業動機づけにどのような影響を及ぼすのか検討するために、制御焦点 (regulatory focus) の視点から研究を行った。

制御焦点とは、Higgins と同僚たちによって提唱された概念であり、目標への到達方法に関する2通りの考え方のことである (Higgins, 1997)。

1つは促進焦点 (promotion focus) であり、望ましい目標に接近しようとする傾向であり、この傾向の強い者は損をするかどうかよりも利益を得るかどうかに関心を示す。

もう1つは抑制焦点 (prevention focus) であり、望ましくない目標を回避しようとする傾向であり、この傾向の強い者は利益を得るかどうかよりも損をするかどうかに関心を示す。

これらの焦点を持つ傾向が強い場合、各個人の中で優勢な制御焦点に一致した情報に敏感になるので、当該の制御焦点に一致した方略を勧められたり使用したりすると、動機づけや遂行が高まることが示されている (Higgins, 2000)。

さらに制御焦点は、個人特性として扱われるとともに、状況によって焦点が異なるということも示唆されており (Higgins & Silberman, 1998)、個人特性として扱う場合には次の方法が用いられている。

Higgins, Roney, Crowe, & Hymes (1994) は現実自己と理想自己、現実自己と義務自己との差を算出し、差の大きい方を個人にとって優勢な制御焦点として扱っている。しかしこの方法は、項目数が多いために回答者に精神的な負担をかける可能性が高い。また、この方法は理想自己や義務自己への意識のしやすさに焦点をあてており、制御焦点の特徴を網羅しているとは言えない。

そこで Lockwood et al. (2002) は、制御焦点尺度を新たに作成し、役割モデルと制御焦点が動機づけにどのような影響を与えるのか検討を行った。その際、個人の制御焦点に適合する方略を用いている役割モデルによりその個人の動機づけは高められると予測した。すなわち、促進焦点が優勢な個人はポジティブ役割モデルに、抑制焦点が優勢な個人はネガティブ役割モデルにより動機づけられる、ということである。仮説は支持され、制御焦点と役割モデルの方向性が合っている場合は、合っていない場合よりも動機づけが高かったことが示された。

さらに、Lockwood, Sadler, Fyman, & Tuck (2004) は、学習面の役割モデルを検討した Lockwood et al. (2002) を発展させ、健康面での役割モデルについて検討している。しかし、これらの役割モデルはすべて研究者側から提示されたものであるため、研究参加者にとって重要な役割モデルとは限らないことが問題として指摘できる。このことは、及川・桜井 (2005) においても実証されている。

そこで本研究では以上の問題点を改善し、まず制御焦点尺度を作成し、尺度の基準連関妥当性を確認する。さらに、ポジティブ・ネガティブ役割モデルと制御焦点との一致・不一致によって動機づけにどのような差がみられるのか検討する。

研究 1

研究1では、今後の研究で使用されるための制御焦点尺度の作成及び類似概念との関連を検討することによって基準連関妥当性を確認する。

制御焦点尺度は Lockwood et al. (2002) ですでに開発されている。しかし、尺度の因子構造については数量的に検討されていない。さらに妥当性については、内容的妥当性及び収束的妥当性の面で検討されているが、特に収束的妥当性においては Lockwood et al. (2002) の一連の研究での知見に基づいた検討のみである。そこで、本研究では客観的な指標で検討する。なお、制御焦点の類似概念として、Lockwood et al. (2002) では楽観主義・悲観主義が、村山 (2004) では達成目標理論が、前

田・浦（2003）では自己指針が示されているので、これらとの関連を検討する。具体的には、促進焦点は楽観主義、マスタリー目標志向、遂行接近目標志向、理想自己指針と正の関連が予測される。抑制焦点は悲観主義、遂行回避目標志向、義務自己指針と正の関連が予測される。

方 法

調査対象者および調査時期 茨城県・栃木県内の大学生及び大学院生307名（男性95名、女性211名、不明1名）に対して、2004年12月8日～17日にわたり実施された。そのうち、妥当性を測定する質問紙に回答した対象者は、69名（男性24名、女性45名）である。

調査内容

1. 制御焦点尺度 制御焦点尺度はLockwood et al. (2002)によれば、促進焦点と抑制焦点を直接的に測定するよう計画され作成されている。例えば、促進焦点であれば、「私は将来自分になりたいと思う人物像についてよく考える」「どのようにすれば自分の希望や願いが叶うのかをよく考える」などの項目が、抑制焦点であれば、「将来自分になりたくないと思う人物像についてよく考える」「日々の生活の中では、悪い出来事が起こらないようにと考えることが多い」などの項目で構成されている。尺度の作成においては、まず、Lockwood et al. (2002)の制御焦点尺度をできるだけ原文に忠実に日本語訳し、大学時代に心理学を専攻した帰国子女にバックトランスレーションを依頼した。その後、バックトランスレーションをもとに項目表現を修正した。この尺度は18項目あり、1（全くあてはまらない）から9（非常にあてはまる）の9段階で評定された。

2. 楽観主義尺度

楽観主義尺度は、中村・押見・小口・池田・清水（2000）の楽観主義尺度を使用した。この尺度は2因子構造をなしており、「結果がどうなるかはつきりしない時は、いつも一番良い面を考える」などの楽観的自己感情と、「自分に都合良く事が運ぶだろうなどとは期待しない」などの悲観的自己感情に分かれる。楽観的自己感情の得点が高いほど楽観的な傾向が高く、悲観的自己感情の得点が高いほど悲観的な傾向が高いことを示している。各因子4項目ずつあり、フィラー項目の4項目を含め全部で12項目を、1（全くあてはまらない）から5（非常にあてはまる）まで5段階で評定された。

3. 目標志向尺度

達成目標理論に基づいた尺度として、田中・山内

（2000）の目標志向尺度を使用した。この尺度は3因子構造であり、「授業中は、できるだけたくさんのことを勉強したいと思います」などのマスタリー目標志向、「他の人より良い点数をとることは、私にとって大切なことです」などの遂行接近目標志向、「悪い成績を取ってしまったらどうしよう」と考えることがよくあります」などの遂行回避目標志向をそれぞれ測定している。なお、この尺度は小・中学生用であったが、内容的には大学生に使用しても問題はないのでそのまま使用した。因子ごとに6項目あり、計18項目について、1（全然あてはまりません）から7（すごくあてはまります）の7段階で評定された。

4. 自己指針

自己指針は、前田・浦（2003）の手続きに従って、3段階で測定された。

第1に、現実自己について測定するために、山本・松井・山成（1982）の自己認知の諸側面尺度の中から、社交・スポーツ能力・知性・優しさ・容貌・生き方・まじめさの7因子から因子負荷量の高い2～3項目を抜き出し、計15項目を選択した。そして「次の特徴のおおのについて、あなたにどの程度あてはまるかをお答えください。」という指示で、1（あてはまらない）から5（あてはまる）の5段階で評定された。

第2に、望ましい自己について、現実自己と同様の項目を用いて測定した。

第3に、先ほどの望ましい自己において、「理想的にはこうありたい」という理想的な自己と、「自分はこうあるべきだ」という義務的な自己が、どれくらいの割合で存在しているのか、合計で100%になるように割り振らせた。

調査手続き 上記の質問紙を、授業時間または授業のない時間帯を利用して、集団形式または個別に実施した。

結果と考察

1. 制御焦点尺度の因子構造の確認

まず、データに欠損値が見られた13名を除外し294名で分析を行った。主成分法、バリマックス回転によって因子分析を行い、Lockwood et al. (2002)と同じ2因子がもっとも適当であると判断した。さらに、項目4「将来自分になりたくないと思う人物像についてよく考える」、項目7「どのようにすれば学業面での目標が達成できるのかとよく考える」、項目11「現在、大学での主な目標は、学業面での目標を達成することである」、項目12「だ

いたいにおいて、失敗することよりも成功することを考える方が多い」の4項目は、両方の因子に負荷量が.30以上であったので削除し、再び因子分析を行った結果、最終的に14項目が残った。この14項目をもって制御焦点尺度とした (Table 1)。

第1因子は、「自分の希望や願いをかなえられるような理想的な人間になりたいと一生懸命努力している」や「将来自分がなりたと思う人物像についてよく考える」のような、Lockwood et al. (2002)での促進焦点にあたる項目がまとまっていたので、因子名を「促進焦点」因子とした。

しかし、この因子には、Lockwood et al. (2002)での抑制焦点にあたる項目「自分の責任や義務を果たすことができるような人間にならなければいけないと一生懸命努力している」が入っていた。この項目は、責任や義務に注目しやすいということが抑制焦点の特徴の一つである (Higgins, 2000) ということから作成された。しかし、調査対象者は「責任や義務」という言葉に反応したというよりも、「一生懸命努力している」という言葉に反応した可能性が考えられる。ある目標に向かって一生懸命努力するということは、方略的な観点から考えれば、接近方略と考えることも可能である。よって、この項目が促進焦点因子に高い負荷量を示したことも妥当と考えることができるのではないだろうか。

第2因子は、「日々の生活の中で、どのようにす

れば失敗を避けられるのかをよく考える」や「自分は責任や義務を果たしていないのではないかとすごく不安に思う」のような、Lockwood et al. (2002)での抑制焦点にあたる項目ですべて構成されていたので、因子名を「抑制焦点因子」とした。

それぞれの因子に負荷量が高い項目で下位尺度得点を作成し、クロンバックの α 係数を算出したところ、促進焦点因子で.81、抑制焦点因子で.72であった。

2. 制御焦点尺度の妥当性の検討

楽観主義尺度を因子分析した結果、中村ら (2000) の因子構造と同様の構造を示すことが確認された。その因子構造に基づき、下位尺度得点を算出した。クロンバックの α 係数は、楽観的自己感情は.71、悲観的自己感情は.63であった。

同様に、目標志向尺度についても因子分析を行い、田中・山内 (2000) の因子構造と同様の構造を示すことが確認された。そして、得られた因子構造に基づき下位尺度得点を算出した。クロンバックの α 係数は、マスタリー目標が.82、遂行接近目標が.85、遂行回避目標が.67となった。

そして制御焦点尺度の2下位尺度 (促進焦点、抑制焦点)、楽観主義尺度の2下位尺度 (楽観的自己感情、悲観的自己感情)、目標志向尺度の3下位尺度 (マスタリー目標、遂行接近目標、遂行回避目標)、自己指針 (理想自己指針、義務自己指針) の

Table 1 制御焦点尺度の因子分析結果 (主成分法, バリマックス回転)

No.	項目	平均値	標準偏差	I	II	共通性
促進焦点 ($\alpha = .81$)						
17	自分の希望や願いを叶えられるような理想的な人間になりたいと一生懸命努力している。	5.83	1.73	.83	.00	.69
16	将来自分がなりたと思う人物像についてよく考える。	6.55	1.86	.75	.03	.56
5	将来自分が成し遂げたいと思う成功について考えることが多い。	6.52	1.82	.73	.03	.53
14	日々の生活の中では、良い結果が得られるようにと考えることが多い。	6.45	1.46	.65	.13	.44
13	自分の責任や義務を果たすことができるような人間にならなければいけないと一生懸命努力している	5.89	1.74	.64	.14	.42
3	どのようにすれば自分の希望や願いが叶うのかをよく考える。	6.74	1.65	.62	.18	.42
15	起きてほしいと願うような良いことが、実際に自分に起こったときのことをよく想像する。	6.11	1.88	.56	.04	.32
抑制焦点 ($\alpha = .72$)						
9	日々の生活の中で、どのようにすれば失敗を避けられるのかをよく考える。	5.67	2.00	.16	.76	.60
2	自分は責任や義務を果たしていないのではないかとすごく不安に思う。	5.67	2.00	-.07	.67	.46
8	起きてほしくないと思うような悪いことが、実際に自分に起こったときのことをよく考える。	5.62	2.34	.16	.67	.47
1	日々の生活の中では、悪い出来事が起こらないようにと考えることが多い。	6.45	1.92	.22	.59	.39
6	学業面での目標を達成できないのではないかとよく悩む。	5.65	2.06	.12	.57	.34
18	現在、大学での主な目標は、学業面で失敗をしないことである。	4.99	2.11	.11	.49	.25
10	利益を得るかどうかわよりも、損をしなくて済むかどうかを考えるほうである。	5.37	1.90	-.16	.46	.24
負荷量平方和				3.46	2.66	6.12
累積寄与率 (%)				24.68	43.69	

それぞれについて相関係数を算出した（Table 2）。

その結果、促進焦点に関しては楽観的自己感情（ $r = .38, p < .01$ ）、マスタリー目標（ $r = .29, p < .05$ ）に有意な正の相関がみられ、予測は支持された。しかし、遂行接近目標（ $r = -.12, n.s.$ ）と理想自己（ $r = -.13, n.s.$ ）とは有意な相関がみられず、予測は支持されなかった。

抑制焦点に関しては、悲観的自己感情（ $r = .41, p < .01$ ）、遂行回避目標（ $r = .47, p < .01$ ）と有意な正の相関がみられ、義務自己（ $r = .24, p < .10$ ）とは有意傾向の正の相関がみられ、予測は支持された。

以上から、大まかな基準関連妥当性が認められたが、予測が支持されなかった部分が2点あった。1つは促進焦点と遂行接近目標に有意な相関が見られなかったことである。遂行接近目標はマスタリー目標（ $r = .27, p < .05$ ）、遂行回避目標（ $r = .47, p < .01$ ）と有意な正の相関がみられた。遂行接近目標は方略は接近方略を用いているが、動機は回避的であるために両方の目標と正の相関がみられたと考えられる。この特徴は促進焦点にもあてはまり、接近方略という特徴に関しては促進焦点と方向が一致しているが、回避動機という特徴とは一致しない。ゆえに促進焦点と有意な相関がみられなかったのではないかと考えられる。

もう1つは促進焦点と理想自己指針に相関がみられなかったことである。しかし、抑制焦点と義務自己指針にはわずかではあるが相関がみられた。Lockwood et al. (2002) によれば、促進焦点と抑制焦点は互いに独立した尺度であり、分析の結果からもそのことは示されている。しかし、今回測定した理想自己指針と義務自己指針は2つで100%になるというイプサティブデータであるので、それらは

独立していない。実際はどちらかの自己指針の傾向があるかどうかのみを測定している可能性が考えられる。今後はこの点について詳細に検討することが期待されるだろう。

研究 2

研究2では、学業面での役割モデルと制御焦点の一致または不一致によって内発的動機づけが異なるかどうかを検討する。具体的には、促進焦点が優勢である場合はネガティブ役割モデルよりもポジティブ役割モデルの方が動機づけが高く、抑制焦点が優勢である場合はポジティブ役割モデルよりもネガティブ役割モデルの方が動機づけが高いと予測する。

Lockwood et al. (2002) では、役割モデルを研究者側から提示して研究を行った。役割モデルと近い概念である理想自己を扱った研究（Moretti & Higgins, 1990）において、個人においてより重要と見なされる理想自己の側面は、研究者側から提示された項目について回答する法則定立的（nomothetic）な方法よりも、回答者自ら特徴について設定する個性記述的（idiographic）な方法の方が表れやすいという知見が示されている。よってここでは個性記述的な、回答者が自らモデルをあげるという方法を採用する。

方 法

実験計画 実験は、制御焦点2（促進・抑制）×役割モデル2（ポジティブ・ネガティブ）の被験者間2要因計画で行われた。

実験参加者 実験参加者は、茨城県・栃木県内の大

Table 2 制御焦点尺度、楽観主義尺度、目標志向尺度、自己指針の相関係数

	平均値	標準偏差	抑制焦点	楽観的 自己感情	悲観的 自己感情	マスタリー 目標	遂行接近 目標	遂行回避 目標	理想自己	義務自己
促進焦点	6.49	0.97	-.08	-.38**	-.06	-.29*	-.12	-.11	-.13	.13
抑制焦点	5.47	1.14		-.47**	-.41**	-.10	-.20	-.46**	-.24†	.24†
楽観的自己感情	3.14	.71			-.41**	-.10	-.34**	-.32**	-.11	-.11
悲観的自己感情	2.91	.69				-.14	-.11	-.13	-.23†	.23†
マスタリー目標	5.06	.82					-.27*	-.01	-.14	.14
遂行接近目標	4.00	1.10						-.47**	-.18	.18
遂行回避目標	4.12	.90							-.27*	.27*
理想自己	63.32	16.91								-1.00**
義務自己	36.68	16.91								

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

学生89名（男性36名，女性53名）である。

実験時期 2004年12月8日～17日に実施された。

質問紙の構成

1. 制御焦点尺度

制御焦点尺度は，研究1で作成された制御焦点尺度を使用し，1（全くあてはまらない）から9（非常にあてはまる）の9段階で評定された。

2. 役割モデル

実験参加者に対して，役割モデル条件ごとに3つの特徴を提示しモデルを思い浮かばせた。3つの特徴とは，ポジティブ役割モデル条件が「知性のある，頭の回転が速い，成績がよい」であり，ネガティブ役割モデル条件が「知性がない，頭の回転が速くない，成績が良くない」である。これらの特徴は，安達・菅宮（2000）や山田（2004）で出された理想自己の側面，山本ら（1982）の自己認知の諸側面の知性因子を参考に選択された。教示は以下の通りである。

3. 役割モデルの評定

役割モデルが操作されているか確かめる項目はLockwood et al. (2002)で示されているが，その項目はモデルが社会的に成功しているかどうかのみを測定しており，そのモデルのようになりたいかどうかを測定していないため変更した。本当に割り振られた条件通りのモデルを想像できたか確かめるために，「先ほどあげた人物のようになりたいと思う」と「先ほどあげた人物のようにはなりたくないと思う」という項目について，1（全くあてはまらない）から5（非常にあてはまる）までの5段階で評定を求めた。ポジティブ役割モデル条件の方が「先ほどあげた人物のようになりたいと思う」に高い評定値をつけ，ネガティブ役割モデル条件の方が「先ほどあげた人物のようにはなりたくないと思う」に高い評定値をつければ，役割モデルは操作されたということになる。

4. 内発的動機づけ

大学生の学業に関する内発的動機づけについて測定するために，桜井・下山・黒田（2004）の内発的動機づけ傾向測定尺度を使用した。この尺度は，内発的動機づけプロセスを三要素，「内発的な欲求」，「その欲求に基づく学習行動」，「その学習の結果としての安定した感情や認知」に分けて，尺度化している（桜井ら，2004）。さらに，それぞれの要素には因子が存在し，「内発的な欲求（以後，欲求と表記する）」には，『知的好奇心（マスタリー目標）』因子（例：いろいろなことを学びたい），『有能さへの欲求（遂行目標）』因子（例：優秀であると認められたい），の2因子がある。「その欲求に基づく学

習行動（以後，学習行動と表記する）」には，『積極探索』因子（例：自分の知識やスキルを向上させてくれるものに挑戦する），『思考と実践』因子（例：学んだことを身の回りの出来事と関連づけて考える），『独立達成』因子（例：難しい問題でも自分の力で解こうと努力している）の3因子がある。「その学習の結果としての安定した感情や認知（以後，感情認知と表記する）」には，『面白さと楽しさ』因子（例：いろいろなことを学ぶことは楽しい），『有能感』因子（例：専門が同じ学生の中では優秀な方である）の2因子がある。

以上の7因子から負荷量の高い項目を3項目ずつ選択し，計21項目を1（全くあてはまらない）から5（よくあてはまる）まで，5段階で評定を求めた。

手続き 上記で構成された冊子を，授業時間または授業のない時間帯を利用して，集団形式に実施した。

結果と考察

まず，データに欠損値がみられたので，2名を除外し87名で分析を行った。制御焦点尺度を因子分析し，研究1で得られた因子構造と同様の構造を示すことを確認した。そして，その因子構造に基づき，下位尺度得点を算出した。その際，クロンバックの α 係数を算出したところ，促進焦点因子は.83，抑制焦点因子は.73であった。

個人の優勢な制御焦点によって，促進焦点優勢群と抑制焦点優勢群とに群分けするために，まずは促進焦点下位尺度得点から抑制焦点下位尺度得点を引き，優勢な制御焦点尺度得点を算出した。この値が正の値であれば促進焦点が優勢であることを示し，負の値であれば抑制焦点が優勢であることを示している。そして，促進焦点優勢群と抑制焦点優勢群を役割モデル条件ごとに作成するので，得点の最大値から10人，最小値から10人ずつ選抜し，今後は計4群に分けて分析を行う。なお，各群の促進焦点下位尺度得点と抑制焦点下位尺度得点の平均値と標準偏差をTable 3に示す。

1. 役割モデルの妥当性の検討

まず，役割モデルの操作チェックを行うために，役割モデルの評定項目の一つである「先ほどあげた人物のようになりたいと思う」という項目について，役割モデル×制御焦点の2要因分散分析を行った。その結果，役割モデルの有意な主効果が得られ（ $F(1, 36) = 16.14, p < .00$ ），ポジティブ役割モデル（ $M = 3.25$ ）の方がネガティブ役割モデル

($M = 1.75$) よりも高く評定されていた。

次に、「先ほどあげた人物のようにはなりたくないと思う」という項目について、役割モデル×制御焦点の2要因分散分析を行った。その結果、役割モデルの有意な主効果が得られ ($F(1, 36) = 33.35$, $p < .00$)、ネガティブ役割モデル ($M = 4.20$) の方がポジティブ役割モデル ($M = 2.10$) よりも高く評定されていた。よって、うまく操作されていたことが示された。

2. 役割モデルと制御焦点の一致・不一致が内発的動機づけに与える影響

桜井ら (2004) に従い、内発的動機づけ尺度の要素ごとに因子分析を行った結果、同様の因子構造を得られた。そして、その因子構造に基づき、下位尺度得点を算出した。その際クロンバックの α 係数を算出したところ、欲求の「知的好奇心」因子は .70, 「有能さへの欲求」因子は .71, 学習行動の「積極探索」因子は .66, 「思考と実践」因子は .79, 「独立達成」因子は .60, 感情認知の「面白さと楽しさ」因子は .85, 「有能感」因子は .67 であった。

役割モデルと制御焦点の一致・不一致が内発的動機づけにどのような影響を与えているのか検討するために、役割モデル×制御焦点の2要因分散分析

を行った (Table 4)。その結果、有能さへの欲求 ($F(1, 36) = 3.02$, $p < .10$) のみ交互作用が有意傾向であった。知的好奇心、思考と実践、有能感には有意な主効果はみられず、積極探索 ($F(1, 36) = 8.82$, $p < .01$) と面白さと楽しさ ($F(1, 36) = 3.58$, $p < .10$) には制御焦点の有意な主効果がみられ、独立達成には役割モデル ($F(1, 36) = 5.74$, $p < .05$) と制御焦点 ($F(1, 36) = 9.36$, $p < .01$) とともに有意な主効果が見られた。

さらに、有能さへの欲求に関して単純主効果検定を行った結果、抑制焦点群において、ネガティブ役割モデル ($M = 4.43$) の方がポジティブ役割モデル ($M = 3.53$) よりも有意に得点が高かった ($F(1, 36) = 4.70$, $p < .05$)。

以上から、有能さへの欲求は、制御焦点のうち促進焦点が優勢であれば、ポジティブ役割モデルであろうとネガティブ役割モデルであろうと有能な人になりたいという気持ちは高い傾向にあるが、抑制焦点が優勢であれば、ネガティブ役割モデルの方により有能な人になりたいと感じやすい傾向があるということが示された。抑制焦点の特徴として Higgins (2000) は、ネガティブな結果の有無に対して敏感であることをあげている。実験では、ネガティブ役割モデル群に対して、「このようにはなりたくない」人をあげるよう指示したが、この指示そのものがネガティブな結果を想像させるものであったので、自らの制御焦点の方向性と一致した結果、有能さへの欲求がより高かったのではないかと考えられる。この結果はこれまでの研究知見とも一致している (Lockwood et al., 2002)。また、役割モデルをあげる際に条件を3つ提示したが、これらの条件は参加者にとって有能さまたは非有能さを表す指標と受け取られ、直接的に有能さへの欲求が意識されやすかった可能性が考えられるだろう。

その他の内発的動機づけ下位尺度は、交互作用に

Table 3 各条件における促進焦点下位尺度得点と抑制焦点下位尺度得点の平均値と標準偏差

	平均値	標準偏差
促進焦点優勢群		
ポジティブ役割モデル条件	3.17	1.06
ネガティブ役割モデル条件	1.43	.65
抑制焦点優勢群		
ポジティブ役割モデル条件	-1.57	.64
ネガティブ役割モデル条件	-.96	.73

Table 4 各条件における内発的動機づけ下位尺度の平均値 (標準偏差) と分散分析結果

	促進焦点優勢群		抑制焦点優勢群		F 値		
	ポジティブ 役割モデル条件	ネガティブ 役割モデル条件	ポジティブ 役割モデル条件	ネガティブ 役割モデル条件	制御焦点	役割モデル	交互作用
知的好奇心	3.87(1.30)	3.97(1.09)	3.17(1.30)	3.83(.65)	1.81	1.53	.84
有能さへの欲求	4.23(.79)	4.13(1.07)	3.53(1.12)	4.43(.65)	.47	1.86	2.90 [†]
思考と実践	3.33(.67)	3.77(1.17)	3.37(1.41)	3.83(1.08)	.02	1.61	.00
積極探索	4.10(.50)	4.13(1.08)	3.03(1.12)	3.47(.86)	8.82**	.64	.47
独立達成	4.10(.61)	4.27(.73)	2.90(1.12)	3.93(.58)	9.36**	5.74*	2.99
面白さと楽しさ	4.20(.48)	4.27(.66)	3.43(1.23)	4.07(.66)	3.58 [†]	1.88	1.23
有能感	3.50(1.12)	3.73(.80)	3.17(1.25)	3.83(.89)	.13	1.90	.44

[†] $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

よる差はみられなかった。その理由としては、参加者があげた役割モデルから各下位尺度へ直接的には意識されにくかったことが考えられる。本研究で使用された内発的動機づけ傾向尺度は、内発的な欲求が沸き起こり、その欲求に基づき学習行動を行い、その学習行動の結果感じる感情認知というプロセスをたどるような因子構成がなされている。しかしそのプロセスを考慮せずにそれぞれ単独に分析を行ってしまったために、このような結果になった可能性が考えられる。

また、本研究では学業面での役割モデルをあげるよう教示したが、学業面という側面は大学生にとってあまり参照しない側面であったために、従属変数への効果が示されなかった可能性も考えられる。本研究では学業面での役割モデルについて検討した。本研究の被験者は大学生であったが、山田（2004）の大学生の自己形成において、大学生が理想自己の特徴としてあげたカテゴリーの中でもっとも多く記述されたのは、「寛大である」などの性格面であった。それに対して、知識面は性格面のおよそ11分の1の人数しか記述されなかったことから、大学生にとって意識されやすいのは性格面であることが理解できる。家島・榎本（2003）においても、パーソナリティ面が影響を与えることが示唆されている。

まとめと今後の課題

本研究では、役割モデルと制御焦点が個人の内発的動機づけにどのような影響を与えるのかを検討した。

研究1では、制御焦点を操作せずに特性として用いるために、Lockwood et al. (2002) の制御焦点尺度を日本語訳し、その基準連関妥当性について検討した。その結果、4項目は削除されたが因子構造はLockwood et al. (2002) と同様で、促進焦点と抑制焦点に分かれていたことが確認された。また、制御焦点と類似の概念との基準連関妥当性も確認された。しかし、促進焦点下位尺度と抑制焦点下位尺度に該当する項目がLockwood et al. (2002) とは一致しなかった項目があり、さらに妥当性も完全に確認されたとはいえないので、今後さらなる検討が必要であろう。

研究2では、研究1で作成された制御焦点尺度を使用し、役割モデルと制御焦点が動機づけに与える影響について検討した。その結果、内発的動機づけ尺度の下位尺度である有能さへの欲求に関しては、抑制焦点が優勢なときにネガティブ役割モデルの効果が示される傾向があることのみ示された。この結

果はLockwood et al. (2002) の知見とは部分的にしか一致しなかった。その理由をもって本研究の問題点とする。

第1には、役割モデルの側面がさほど個人に影響を及ぼさなかった可能性である。大学生においては学業面での役割モデルの影響は全体的に弱く、人格面など他の側面に関する役割モデルの方が影響を及ぼしやすいのではないかと考えられる。このことは山田（2004）における、大学生により表出された理想自己の側面からもうかがうことができる。

第2には、成功や失敗についての考え方の違いがあげられる。何をもってポジティブ役割モデルとするかネガティブ役割モデルとするかが個人によって異なっていたために、客観的には成功していたとしても、それがポジティブ役割モデルとしての強い指標とはならず、Lockwood et al. (2002) と整合しない結果となってしまったと考えられる。

以上をふまえて、今後期待される研究の方向性として3点述べる。第1は、個人にとってより影響を与える役割モデルの検討である。本研究では学業面での役割モデルは幾分影響を与えるということが示された。しかし、家島・榎本（2003）や山田（2004）では学業面の役割モデルよりも人格面での役割モデルの方が大学生にとっては意識されやすく生き方に影響を与えやすいということが示唆されているので、人格面における役割モデルに関してもさらなる研究が期待される。第2は、役割モデルが影響を与える側面についてである。本研究では学業面での内発的動機づけの側面において検討した。今後は他の側面においての検討が必要とされるであろう。第3は、制御焦点尺度のさらなる検討である。Lockwood et al. (2002) に続き、本研究でも制御焦点尺度の有用性が示された。しかし本研究で作成された尺度は基準連関妥当性の検討のみにとどまり、構成概念妥当性や再検査信頼性などの検討を行っていない。今後はさらなる尺度の検討が求められるだろう。

引用文献

- 安達喜美子・菅宮正裕（2000）. 自己像と自尊感情および自己成長意欲との関連について－理想自己を捉える際の新たな観点を加えて－ 茨城大学教育学部紀要（教育科学），49，143-155.
- (Adachi, K. & Sugamiya, M. (2000). Relations between Self-image, Self-esteem and Self-motivation in Growing: New perspective on ideal-self. *Bulletin of the Faculty of Education*,

- Ibaraki University. *Educational Science*, 49, 143-155.)
- Bandura, A. (1971). *Psychological modeling: Conflict-ing theories*. Chicago: Aldine-Atherton.
- (バンデューラ, A. 原野広太郎・福島脩美 (訳) (1975). モデリングの心理学－観察学習の理論と方法－ 金子書房)
- Gibson, D.E. (2004). Role models in career development: New directions for theory and research. *Journal of Vocational Behavior*, 65, 134-156.
- Gibson, D.E. (in press). Developing the professional self-concept: Role model construals in early, middle, and late career stages. *Organization Science*.
- Higgins, E.T. (1997). Beyond pleasure and pain. *American Psychologist*, 52, 1280-1300.
- Higgins, E.T. (2000). Making a good decision: Value from fit. *American Psychologist*, 55, 1217-1230.
- Higgins, E.T., & Silverman, I. (1998). Development of regulatory focus: Promotion and prevention as ways of loving. In J. Heckhausen & C.S. Dweck (Eds.), *Motivation and self-regulation across the life span*. New York: Cambridge University Press, pp.78-113.
- Higgins, E.T., Roney, C.J.R., Crowe, E., & Hymes, C. (1994). Ideal versus ought predilections for approach and avoidance: distinct self-regulatory systems. *Journal of personality and social. Psychology*, 66, 276-286.
- Ibarra, H. (1999). Provisional selves: Experimenting with image and identity in professional adaptation. *Administrative Science Quarterly*, 44, 764-791.
- Ibarra, H. (2000). Making partner: The mentor's guide to the psychological journey. *Harvard Business Review*, 147-155.
- 家島明彦・榎本博明 (2003). 大学生の理想・生き方に影響を与えた人物に関する研究－「こうなりたい」人物と「こうはなりたくない」人物 日本心理学会第67回大会発表論文集, 180. (Ieshima, A. & Enomoto, H.)
- Krumboltz, J.D. (1996). A learning theory of career counseling. In M.L. Savickas, & W.B. Walsh (Eds.), *Handbook of career counseling theory and practice*. Palo Alto, CA: Davis-Black Publishing/ Consulting Psychologists Press, pp. 55-80.
- Lockwood, P. (2002). Could it happen to you? Predicting the impact of downward comparisons on the self. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 343-358.
- Lockwood, P., & Kunda, Z. (1997). Superstars and me: Predicting the impact of role models on the self. *Journal of Personality and Social Psychology*, 73, 91-103.
- Lockwood, P., & Kunda, Z. (1999). Increasing the salience of one's best selves can undermine inspiration by outstanding role models. *Journal of Personality and Social Psychology*, 76, 214-228.
- Lockwood, P., Jordan, C.H., & Kunda, Z. (2002). Motivation by positive or negative role models: Regulatory focus determines who will best inspire us. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83, 854-864.
- Lockwood, P., Sadler, P., Fyman, K., & Tuck, S. (2004). To do or not to do: using positive and negative role models to harness motivation. *Social cognition*, 22, 422-450.
- 前田和寛・浦 光博 (2003). 挑戦か、安全か－自己指針と課題の枠組みが目標の再設定に及ぼす影響－ 社会心理学会第44回大会発表論文集, 94-95. (Maeda, K. & Ura, M.)
- Moretti, M.M. & Higgins, E.T. (1990). Relating self－discrepancy to self-esteem: The contribution of discrepancy beyond actual-self ratings. *Journal of Experimental Social Psychology*, 26, 108-123.
- 村山 航 (2004). ポジティブな目標表象とネガティブな目標表象－“3次元の枠組み”の提唱－ 教育心理学研究, 52, 199-213. (Murayama, K. (2004). The three dimensional framework of positive and negative goal representation. The Japanese Journal of Educational Psychology, 52, 199-213.)
- 中村陽吉 (2000). 対面場面における心理的個人差－測定の対象についての分類を中心にして－ ブレーン出版 (Nakamura, H. (2000). *Individual differences of psychological characteristics in the face-to face setting*. Tokyo: Brain Press.)
- 及川千都子・桜井茂男 (2005). 役割モデルと制御焦点の方向が動機づけに与える影響 日本教育

- 心理学会第47回大会発表論文集, 183.
(Oikawa, C. & Sakurai, S.)
- 桜井茂男・下山晃司・黒田祐二 (2004). 大学生における内発的動機づけ傾向の測定に関する予備的研究 日本心理学会第68回大会発表論文集, 903.
(Sakurai, S., Shimoyama, K., & Kuroda, Y.)
- Stapel, D.A., & Kooman, W. (2001). I, we, and the effects of others on me: How self-construal level moderates social comparison effects. *Journal of Personality and Social Psychology*, 80, 766-781.
- 祐宗省三・春木 豊・小林重雄 (編) (1984). 行動療法入門－臨床のための理論と技法 川島書店
(Sukemune, S., Haruki, Y., & Kobayashi, S.)
- 田中あゆみ・山内弘継 (2000). 教室における達成動機, 目標志向, 内発的興味, 学業成績の因果モデルの検討 心理学研究, 71, 317-324.
(Tanaka, A. & Yamauchi, H. (2000). Causal models of achievement motive, goal orientation, intrinsic interest, and academic achievement in classroom. *The Japanese Journal of Psychology*, 71, 317-324.)
- Taylor, S.E., & Brown, J.D. (1988). Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, 103, 193-210.
- 山田剛史 (2004). 理想自己の観点からみた大学生の自己形成に関する研究 パーソナリティ研究, 12, 59-72.
(Yamada, T. (2004). Self-development of college students in terms of ideal self. *The Japanese Journal of Personality*, 12, 59-72.)
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.
(Yamamoto, M., Matsui, Y., & Yamanari, Y.)
(受稿3月22日: 受理5月18日)